

イネばか苗病（病原菌：*Gibberella fujikuroi*）

○ 被害と発生生態

箱育苗、本田で発生する糸状菌病である。

罹病苗は黄化徒長するが、重症苗は発芽後間もなく枯死する。本田でも罹病株は黄化・徒長し、重症株は枯死する。出穂しても不稔になる。罹病株では地上部の節から不定根が形成され、枯死株の葉鞘には白ないし帯紅白色の粉状物が一面に付いていることが多い。

病原菌は分生子と子のう胞子を形成し、分生子は出穂後の籾に付着または開花中の籾の中に侵入し、汚染籾、罹病籾となって翌年の伝染源となる。病原菌は種籾上で越冬し、種子の発芽とともに多くは傷口より幼苗組織に入り発病させる。この病気にかかったイネは、病原菌の分泌するジベレリンの作用により徒長し、8月頃に葉鞘に分生子を生じ、これが伝染源となる。病菌の発育適温は25℃前後で、籾またはわらに付着して数年間生存する。

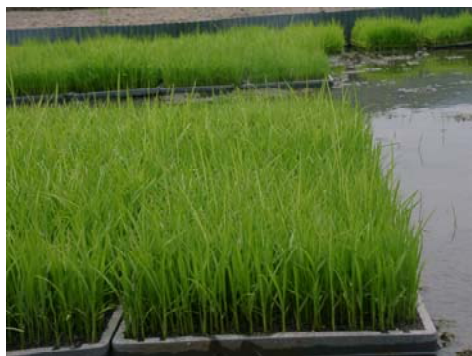
○ 防除方法

（ア）耕種・物理的防除

- ・ 種子を温湯に浸漬（60℃、10～15分処理）する。
- ・ 発病田からの採種を避け、無病籾を塩水選する。
- ・ 罹病苗は抜き取り、本田に植え付けないようにする。
- ・ 被害わら内の病原菌は数年間生存するので、被害わらを本田付近に放置しないで処分する。

（イ）薬剤防除

- ・ 種子消毒を徹底する。
- ・ 種子消毒では、ベノミル剤、トリフルミゾール剤耐性菌が県内の広範囲に発生（平成9年ベノミル剤：88.3%、トリフルミゾール剤：76.5%）しているので、薬剤の選択に留意する。



箱育苗での発病株



本田での発病株



葉鞘に形成された分生子